様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　25 年　5 月　24 日現在

機関番号：３３８０８
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2010～2012
課題番号：２２６５３０８６
研究課題名（和文）　援助専門職による高齢者虐待の予防に資する共感性低下現象（共感的排除）の解明
研究課題名（英文）　Understanding the mechanisms of empathic exclusion in elderly abuse by human service professionals.
研究代表者
波多野　純　（HATANO　JUN）
静岡英和学院大学・人間社会学部・教授
研究者番号：10311953

研究成果の概要（和文）：介護施設の援助専門職がなぜ虐待行為を行うのか。本研究は，高齢者に対する共感性が低下する現象に焦点を当て，共感的排除のメカニズムを解明することを試みた。過去の研究から，非人間化に関する知見が高齢者虐待の理解に有効であることが分かった。高齢者の示す手がかりが，非人間化を促進し，高齢者に対する共感性を低下させるのではないかと仮説を設定し，実験を行った。その結果，介護時に高齢者の肉体を露出させると人間らしさが低下することが示された。

研究成果の概要（英文）：Why some human service professionals abuse their clients? This research focused on decreasing empathy for elderly, and examined the mechanisms of “empathic exclusion”. Previous studies suggested that dehumanization research offered effective framework to understand elderly abuse. On the hypothesis that some characteristics of care settings elicit dehumanization of elderly person and decrease empathy, the experimental examination was conducted. The results supported the hypothesis that revealing flesh in care settings reduced humanness of elderly person.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	500,000	0	500,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
2012 年度	200,000	60,000	260,000
年度			
年度			
総　計	1,200,000	210,000	1,410,000

研究分野：社会心理学
科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学
キーワード：介護・共感性・対人援助・組織心理・高齢者虐待

１．研究開始当初の背景

(1)わが国の総人口に占める後期高齢者の割合は 10%を超え，社会の高齢化は今後も一層進展する見通しである。高齢者に対する心理社会的援助の重要性が強調される中で，援助活動を担う専門職チームへの臨床心理学からの貢献が期待されている。しかし，高齢者支援に関する臨床心理学的研究は少なく，理解の進んでいない問題が山積している。そのひとつが専門的援助者による高齢者虐待の問題である。高齢者を援助していた者が虐待者となる過程は明らかでなく，いくつかの調査や事例研究が業務の多忙さや援助者の疲弊などとの関連を指摘しているのみで，新たな研究の枠組みが必要である。

(2)本研究を計画した動機は，応募者が心理学における残虐行為研究を展望する過程で，被害者の人間らしさが否認されるメカニズムを考察したことから生じている(波多野，2009)。そこで注目した非人間化研究の知見は，普通の人びとが残虐行為の実行者に変容する過程を検討する枠組みとなるものであった。さらに，日常のいじめを対象とした研究で被害者への非人間化が生じていることが明らかとなり，被害者を共感対象から排除するという「共感的排除」現象を手がかりにして，援助者による虐待が生じるメカニズムを研究するという着想を得た。

２．研究の目的

本研究は，高齢社会の進展によってますます重要となる対人援助業務の質的向上のために，援助者の共感性が著しく低下してしまう「共感的排除」現象の解明を目指した。共感性は，福祉や医療などあらゆる対人援助活動に不可欠であり，共感性の極端な低下は援助の過程で生じる重大な危機である。その深刻な影響は，援助者による高齢者虐待などに見ることができるが，この分野の臨床心理学的研究は立ち遅れている。本研究では，高齢者への援助における「共感的排除」の具体的な様態や原因および影響を，心理学における非人間化研究の知見をもちいて実証的に検討した。これらの研究を通じて，臨床心理学領域で蓄積が不足している高齢者援助についての新たな研究課題を創出するとともに，エビデンスに基づく対人援助過程の理解や援助技術の構築，援助者の教育・訓練に資する事実の収集とその体系的理解を試みた。

３．研究の方法

本研究は，高齢者への対人援助活動場面を対象として実施される３年計画の研究であった。高齢者援助における「共感的排除」の概念によって問題を提起し(2010 年度)，「援助者→虐待者変容モデル」を構築し，質的研究(2011 年度)と実験研究(2012 年度)により概念モデルの検証を行なった。

(1)2010 年度は，高齢者介護，高齢者虐待，道徳判断，非人間化に関する研究のレビューを行い，高齢者援助場面を想定した「共感的排除」概念のモデル作りを行った。

(2)2011 年度は，共感的排除の概念を精緻化するために，その具体的様態を高齢者援助の現場から収集し，共感的排除に関する質的研究を行なった。静岡県内の特別養護老人ホームおよび介護付き有料老人ホームで介護職にある専任職員 16 名（男性 3 名，女性 13 名）を対象に，インタビューを実施した。インタビューは，協力者の職場会議室や面接室を利用して個別に行なった。あらかじめ主要なインタビュー項目を決めておき，協力者の回答に応じて内容の詳細を聞き取っていく半構造化面接であった。インタビュー項目は，協力者の勤続年数等の基本情報，日常の業務の流れ，介護職を選んだ理由，日常の業務負担感，自分が理想とするケアとその阻害要因などであった。面接時間はおよそ 60 分～90 分であった。

(3) 2012 年度は以下の実験を行った。

介護場面での高齢者虐待は，何らかの刺激が手がかりとなって高齢者の非人間化が生じ，攻撃行動の心理的抑制が低減されることで生じやすくなると考えられる(波多野，2011)。非人間化は肉体に注意を向けることで促進されることがわかってきた。Gray, Knobe, Sheskin, Bloom, & Barrett(2011)は，写真の人物の心的能力を評価させる実験において，肉体が多く露出している写真では対象人物の道徳判断や自己制御などの高次の能力が低く見積もられるとの結果を得ている。高齢者の介護では，入浴や排泄など肉体の露出を避けがたい場面があるため，それが介護者や周囲から見た人間らしさの認知に与える影響は，虐待予防を検討する上で重要な情報となろう。そこで本研究では，入浴介助場面の写真を材料として，介助されている高齢者の肉体の露出程度が，心的能力の評価に及ぼす影響を検討する。成人男女の写真を用いた Gray et al(2011)では，肉体の露出によって上述の能力(Agency)が低く評価され，Experience 能力は高く評価されていたが，同様の影響が高齢者の介護場面でも見られるか検討した。

実験参加者　大学生 49 名（男性 25 名，女性 24 名，平均年齢 22 歳)。講義時間を利用して集団実施した。

要因計画　2(参加者の性別：男性，女性)×2(能力の次元：Agency，Experience)×2(肉体の露出：多い，少ない)。性別のみ被験者間要因であった。

手続き　参加者はスライドプロジェクターによって教示と刺激（写真）を提示された。「写真から能力を推測する研究の一部」と説明され，写真を１枚ずつ提示された。写真毎に 11 項目の質問紙に回答した。写真は 4 枚で，すべて高齢者の入浴介助場面を撮影したものであった。写真は 1 枚ずつ約 3 分提示し，全員が回答したら次の写真を提示した。1 枚目と 3 枚目が肉体の露出の多い条件であった。回答が終了した後，実験目的の詳細な説明を行い，回答用紙を回収した。

刺激　写真はすべてモノクロ写真で，男性高齢者 1 名が仰臥位で入浴していた。浴槽周囲には介助者が写っていた。写真は人物の顔がわからないよう加工して使用した。肉体の露出は，写真の高齢者の身体が覆われていない

範囲の広さで操作した。露出が多い条件では人物の上半身が露出しており，少ない条件では顔と首を除く上半身がタオルで覆われていた。
従属変数　(1)Gray et al(2011, *JPSP*)で用いられた6個の心的能力(Agency：自己制御，道徳的行動，計画/Experience：喜び，欲望，恐怖)に「痛み」「ひとの気持ちの理解」という2つを加え，8つの能力について5件法(1非常に劣っている～5非常に優れている)で回答を求めた。(2)高齢者介護において虐待・不適切とされる3つの行為（身体拘束，大声で叱る，排泄を我慢させる）を，写真の人物に行うことがどの程度許容できるかを5件法(1が許容できない)でたずねた。

４．研究成果

(1)文献研究および理論的研究

高齢者施設での対人援助専門職従事者による虐待を，高齢者に対する非人間化と共感的感情の変化という視点で議論し，関連研究を展望した。高齢者に対する非人間化を，幼児化，モノ化，抽象化，動物化，機械化という5つの様態に区別した。施設の高齢者が非人間化されるメカニズムは，擬人化を逆行する過程として説明した。高齢者が示すさまざまな特徴が，援助者から見て“人間”概念を活性化する認知的手がかりとして機能しないために非人間化は生じると考えられる。非人間化の結果，援助者は高齢者に対して共感的感情を喚起されにくくなり，虐待行為への心理的抑制が低減されるというモデルを提示した。最後に，今後の研究枠組みとして「共感の不活性化」という概念を提案した。共感的排除のアイデアを図1のような「共感の不活性化」の概念モデルにまとめ，学術誌に論文を発表した。先行研究を展望した結果，高齢者介護や高齢者虐待に関する心理学的研究は増加しているものの，虐待行為に至るメカニズムへの関心は低く，援助者の共感に注目した研究が必要であるとの提言を行った。

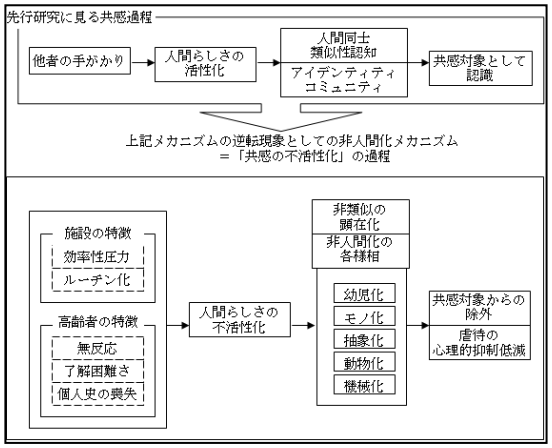

図１　「共感の不活性化」の概念構成

(2)インタビューによる質的研究

インタビューによって得られたデータを，修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチの方法を参考に分析を行った。介護職従事者の日常の活動の中で，共感の不活性化につながるような高齢者の非人間化が，マイルドな形ながらも経験されていることが分かった。その主な様態としては，幼児化やモノ化であった。ただし興味深いことに，高齢者への攻撃的感情や態度が高まるのは，高齢者を非人間化した時だけでなく，日常では非人間化している高齢者が，何らかの契機によって人間化された時であることも示唆された。被援助者に対する態度を規定する上で時間的切迫感の影響が強いこと，それにもかかわらず業務遂行の時間的遅れが何をもたらすのかについては明確な説明を欠いていることなどが示されている。状況要因としての多忙さが被援助者への認知に与える影響を，具体的な文脈との関連でモデル化し，論文にまとめている。

(3)高齢者の非人間化に関する実験研究

指標の検討　1枚目の写真に対して得られた8つの心的能力の評価得点を因子分析（主因子法，バリマックス回転）した結果，Gray et al(2011)とは異なる3因子が抽出された。喜び，自己制御，欲望，計画が第1因子(主体性因子，α=.75)を，道徳的行動，ひとの気持ちの理解が第2因子(共感性因子，α=.70)，恐怖が単一で第3因子（恐怖因子）を構成し，痛みは除外された。3因子による累積寄与率は52.76%であった。

心的能力の評価　4枚の写真に対する心的能力の評価得点を肉体の露出条件別に合算し，因子毎に平均値を算出した。それに対する2(性別)×3(能力：主体性，共感性，恐怖)×2(露出)の分散分析の結果，性別の主効果($F(1,47)=4.17$, $p<.05$, 男性>女性)，能力の主効果($F(2,94)=16.92$, $p<.00$)，能力×露出($F(2,94)=6.09$, $p<.01$)が有意であった。単純主効果の検定の結果，露出多条件での能力の効果($F(2,188)=21.11$, $p<.00$)，露出少条件での能力の効果($F(2,188)=4.88$, $p<.01$)，主体性評価における露出の効果($F(1,141)=4.41$, $p<.05$)，恐怖における露出の効果($F(1,141)=4.52$, $p<.05$)がそれぞれ有意であった(図2)。Gray et al(2011)と能力評価因子が異なるものの，肉体の露出は高次能力の評価を低め，非人間化を促進していた。能力評価に性別の主効果(男>女)があった理由が，刺激人物の性別によるものかは今後の検討課題である。

不適切な介護の許容については，行為毎に性別×露出の分散分析を行った。その結果，どの行為においても有意な効果は見られなかった。不適切な介護に対する許容度は，いずれの条件においても低かった。

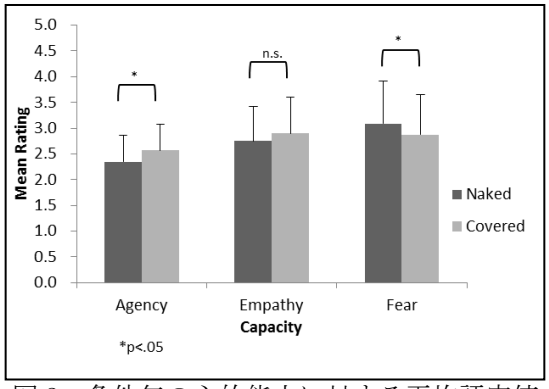

図２　条件毎の心的能力に対する平均評定値

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
(1)波多野純　(2011).　介護施設における高齢者の非人間化について.　臨床心理学, 64, 583-594.

〔学会発表〕（計１件）
(1)波多野純　(2013).　介護場面での高齢者の肉体の露出が非人間化に及ぼす影響. 日本心理学会第 77 回大会(2013 年 9 月 19 日～21 日発表予定)

〔その他〕
ホームページ等　なし

６．研究組織
(1)研究代表者
　波多野　純（HATANO JUN）
　静岡英和学院大学・人間社会学部・教授
　研究者番号：10311953

(2)研究分担者　なし

(3)連携研究者　なし